良基連歌論の付合について

金子金治郎

はじめに

良基の連歌表現論について、これまでその方法に関する面を整理してきたが、その一環として、ここに付合の問題を取りあげてみたい。いうまでもなく付合の問題は、連歌に独自な方面であって、連歌表現論の中心的な分野をなしている。自然良基の連歌論書もこの方面について説くところが多く、豊富な資料を提供しているので、それによって整理を行ってみたい。

付合論の方法に関する面を問題にするのであるから、付合によってどんな風体美が実現されるかといった方面には触れない。付合によって実現される風体美を問題にする前に、付合という表現作用をどのように認識していたかを問題にしようとするのである。付合という表現作用に対する認識の仕方が、付合論の方法となり、それによって風体美の追求もなされるわけであるから、風体美を云々する以前の基礎的な問題だということができる。付合に対する認識の仕方を問題にするということは、実際には、付合論を構築している関

係の術語を問題にすることである。それらの術語がどんな概念を持ち、付合という表現作用のどこをどんなに把握していたかが問題になる。このようなことは識者にとって自明なことかも知れないのだが、良基の連歌表現論を、良基の表現意識に即して正確に理解するためには、やはりここから出発したいのである。

問題はおよそ三つに括られる。第一は、付合における付けるという作用そのものについて、第二は、付合を成立させる諸要件について、第三は、付合のいろいろな構造について、それぞれどのように認識していたかである。

一　付　合

付ける作用そのものを現わすには、他動詞の「付く」がもっとも普通に用いられ、名詞「付合（つけあひ）」も僅かながら出現している。そのほかに「寄り合ふ」「取り寄る」が近い意味で用いられている。

(1)付　く

短連歌時代から普通に用いられてきた基本的な術語である。大和物語の「よみがたかるべきするをつけさせむとて」（檜垣嫗）、俊頼髄脳の「心のこりて、つくる人にいひはてさする」などを始め、歌論・私歌集などの連歌関係の記事・詞書などから多くの用例を挙げることができる。良基連歌論でもこの伝統的な術語がもっとも多く用いられている。一々は挙げないが、後で引くいくつかの例文によって推察していたゞけると思う。

この「付く」自身については、伝統的な用法という以上に特に注意すべき点は認められない。ただ良基以前に存したかと思われる術語で、すでに用いられなくなったものはある。続詞花集の聯歌の部に、「ある山ぶしの歌のするをいひたりければ、もとをつきける」とあるのは、四段の「継ぐ」と解される例で、万葉巻八の「末句を続ぎて」を想起させるものである。しかし続詞花集の他の例は、すべて下二段の「付く」であるから、「もとをつきける」は、不審である。これと違って八雲御抄に次の例がある。「校本八雲御抄とその研究」によると、

たゞ上句にても下句にてもいひかけつれば、いまなからをつゞけるなり（玄覚本・前田本は、つゞけらる）

とある。「つゞけるなり」はいかにしても不審で、あるいは「つけゝるなり」の誤写であったかとも想像される。それはとにかく、もし別本の「つゞけらる」が確かな用法であったとすれば、注意すべき例となる。というのは、僻連抄・連理秘抄に、中比（後鳥羽院より前の時代）には連歌のことを「つゞけ歌」と呼んだと記しているからである。「つゞけ歌」と「つゞけらる」に関連があると考えられるとすれば、あるいは「つゞく」（他動詞下二段）の用法が存したかも知れないということになる。以上の二例は、どちらも不充分な例であったが、とにかくどちらも良基連歌論にはなく、「付く」が一般的に用いられ、それにそれ以前に見られなかった「寄り合ふ」「取り寄る」などが登場するのである。

(2)寄り合ふ

良基連歌論に頻出する「寄合」の語は、多く名詞「寄り合ひ」であるが、（これは後に取りあげる）、その中に「寄り合ふ」と動詞に用いられる場合がある。ここに取りあげるのは後者である。たとえば次のようである。

①万葉に都をとをみいたづらにふくと云事、與ありて寄合侍り。（擊蒙抄）

②心ガオモシロク寄合ナリ。（九州問答）

③四手ニ寄合タル様ニテ心ガノク也。（同）

④一句面白て寄合候べく候。（下草）

前の「付く」と違って、付ける作用を自動的なものとして把握したところに著しい特色が見られる。いずれも付ける作用そのものを指しているように見える。しかし少し注意してみればわかるように、付ける作用そのものを抽象的に言っているのではなく、付く関係を成立させる詞とか心とかの契機を踏まえ、その上に付く関係の成立することを「寄り合ふ」と言っている。①の本歌、②の心がその契機となるもので、これなど前記の指摘がよく窺え、ここには挙げなかったが他にもその例は多い。③の「四手ニ寄合タル」もそう解すべきものである。④は抽象的に付ける作用そのものを指すようであるが、やはり準じて考えるべきだと思う。結局この「寄り合ふ」は、付く関係を成立させている契機に対する認識が深くなり、その機能を重視し、それに即して付ける作用を捉えるようになったところから生じたものと解される。

(3)取り寄る

前項の「寄り合ふ」よりも、さらに付く関係の契機に即したのが「取り寄る」である。

○前句ニトリ寄所、又本哥寄合アラン時、名所ヲせヲルベキ也。（九州）

○この句にはこれこそ取（よる）べき所よと見えて、さし出（た）らむ詞にても、寄合にてもを目にかけて、（僻連。校合連理）

後者の例は、僻連では単に「取る」とあるが、その例も「こと葉をあらぬ様にひき遣てとりたるも」（僻連）のように見え、また「むかへばといふ詞にとりよからんとて、池の鏡をよせたる」（擊蒙）のごとく、「取る」と「寄せる」に分解して用いる例もある。この「取り寄る」の用例は「寄り合ふ」よりも少い。あまりに付く関係の契機に即しすぎていて、「付く」の抽象化された用法から遠いが、「寄り合ふ」と同じように、付く関係を成立させる契機を重視し、それに深い注意を向けていることは明らかである。

(4)付　合

付ける作用そのものを名詞化した「付合（つけあひ）」も、僅かながら出現している。前の「寄り合ふ」「取り寄る」が、付く関係の分析的把握を示していたのに対して、この名詞化は、総括的概念化の傾向を示すものである。良基連歌論で確かなものは、次に挙げる二例である。

○連歌は句作も心も古物にて候へ共、つけあひによりて新く聞候事納得仕候訖（下草。了俊の詞）

○又付合は十方より取寄べき也。皆人近日一方よりよるやうに見ゆ、しかるべからず。（十問最秘抄）

（右の外、平松本智連抄に二例あるが、東北大本知連抄の該当個所に見えない点が、用例として弱い。）

この「つけあひ」は、もっとも広く用いられた「付く」から来て、複合名詞化したもので、「付合は十方より取寄べき也」で知られるように、「取り寄る」よりも総括的な概念をなしている。良基にあっては、晩年の著作に僅かに現われるが、後世もっとも広く使用されるものである。

この総括的概念化の傾向といい、前の「寄り合ふ」「取り寄る」に見る分析的傾向といい、付ける作用に対する認識の深化成長を窺わせるものであるが、そのことは、次に挙げる付合の諸体をめぐってかなり詳しく示されている。

二　付合の諸体

良基の連歌論書には、付合の諸体について種々の名目を立てて述べているところがある。名目を立てる基準はまちまちであるが、その命名や説明・作例などを検討して行くと、付合についての認識がよくわかる。まず全体を展望して続いてその基準について考えてみたい。

(a)【僻連抄・連理秘抄】平付・四手・景気・心付・詞付・埋付・余情・対揚（相対）・引違・隠題・本歌・本説・名所・異物・狂句（×印は主として一句の上について説くもの。よって除外する。）

(b)【撃蒙抄】集景物・除景物・対揚・引違・本文・名所・異物・韻字（外に初学・秀逸・倒語・和漢・発句・脇句があるが、付合の名目ではない。）

(c)【筑波問答】幽玄体・風情句・眺望句・本歌句・古事句・心付句・詞付句・対揚句・歌寄合句・てにはの躰・季替句躰・誹諧・鬼語・狂句・初学体（×印は風体また一句に関するもの。除外する。）

(d)【知連抄】（東北大本）

てにをは六の次第＝歌てには・心てには・請取てにをは・かけてには・捨てには・とがめてには。

てにをは三種＝（たがひてには・みだれてには・分てには。）重てには。

六の句作＝思ひ句・分句・かけ句・遣句・風情の句・退句

五体＝(1)秋の月の山の端にのぞむがごとし（遠見の体）・(2)舟の遠島にうきしづむがごとし（慈愛体）・(3)隣にさゞめ事をするがごとし（異説体）・(4)秋の風万葉を吹なびかするがごとし（長語の体）・(5)絵書女の人をなやますがごとし（思覚体）。

（括弧の中は、伝宗祇著、連歌諸躰秘伝抄が標示する名目）

この中でもっとも代表的な名目を揃えているのは、僻連・連理の十五体で、これには簡単な説明もあってその意がある程度明らかになる。後世の伝宗祇著「連歌秘伝抄」に挙げられて有名になる付様入体は、

平付・四手付・風情付・心付・詞付・埋付・相対付・違付

であるが、これは全部僻連・連理の十五体に含まれている。（風情付＝景気、違付＝引違）。撃蒙・筑波の諸体も僻連・連理に通じるものが多い。撃蒙には説明と例句があってもっとも明瞭であるが、筑波は名目だけの列挙であるから、僻連・連理に一致する名目は一応同一と見なすにしても、名目は類似しても同一か別か判別できないものがある。しかし総体的に見て、以上の三書には共通性がある。それに対し知連抄の名目は、かなり特異な性質を持っている。その中「てにをは六の次第」同「三種」は、撃蒙の韻字の発展であり、筑波問答の「てにはの躰」も、説明はないが同じ問題かと思われ、これは共通性を持っている。しかし「六の句作」「五体」の名目の立て方は違っている。ことに比喩を表に立てている五体には、付合の作用とともに風体への着目もあって十分に分化した名目では

ない。特に(2)「舟の遠島に」は全く風体だけであって、除外すべきものである。「六の句作」「五体」の名目を、僻連・連理や撃蒙・筑波の名目に引きあてゝみると、多少ずれのあるものもあるが、およそ次のようになる。

思ひ句→心付。　分句→四手。　風情の句→景気、
遣句……→眺望（？）　(1)秋月山端→遣句……→眺望（？）
(3)隣家私語→詞付。　(4)秋風万葉→集景物　(5)絵書女→景気

この外に、「かけ句」「退句」があるが、前者は取り成して付けるもの、後者は「かけてには」縁語などで転ずるもので、僻連等に見えなかった名目である。

付合諸体の展望であったが、次にこれらの名目を立てる基準について考えてみたい。結論的にいうと、大きく二つの基準があった。一つは、句の内容・素材・用語などの要素に着目し、そこに付合を成立させる契機の存することを認めるものである。付合の要件と略称する。他の一つは、前句と付句とがどんな構造的な関係で付いているかに着目するものである。付合の型と略称する。前者を一類とし、後者を二類として、これまでに展望した名目を分類すれば次のようになる。名目は違っても同じと思われるものは、それぞれ一括している。

一類（付合の要件）
○心付（a・c）―思ひ句（d）
○詞付（a・c）―隣家私語（d）
　韻字（b）―てにはの躰（c）―てにをは六の次第・同三種（d）
○景気（a）―風情句（c・d）―絵書女（d）
　眺望句（c）―※遣句（d）―※秋月山端（d）
　本歌（a・c）―歌寄合句（c）
　本説（a）本文（b）―古事句（c）
　名所（a・b）

二類（付合の型）
○平付（a）。
○四手（a）。―集景物（b）。―分句（d）。―秋風万葉（d）。
　除景物（b）。
○埋付（a）。
　余情（a）。
○対揚（相対）（a・b・c）。―季替句躰（c）。
○引違（a・b）。
　かけ句（d）。
　退句（d）。

（※印は、ほぼそれに該当するかと思うもの。○印は伝宗祇の連歌秘伝抄の付様八体に一致するものである。）

ここに分類した多くの名目について、その主要なものは後に説明を加えることになる。その中一類の韻字（てにをは）は、句末にくる語句に着目し、それが付合の成立になんらかの機能を果たすと考えるもので、これについては別に考察しているので省略する。（国文学攷第二十三号。「良基連歌論における『てにをは』の意義」）

三　付合の要件

一類の諸名目は、句を構成する内容・素材・用語などの要素が、

付合を成立させる契機となるものであったが、その点を具体的に考察するのが、ここでの第一の問題である。それは付合の成立に参加する要件を分析的に認識するものであって、この分析的認識の点で顕著な発達を示したのが寄合の問題である。第二に寄合について考えてみたい。第三に小宛に触れたい。これは付合に参加する要件のどこをどう摑むかの問題である。

第一の具体的点検では、心付と詞付を主として扱ってみたい。後世もっとも普遍的に用いられる名目であるだけに、その良基における用法を確認する必要がある。

(1)心　付

僻連・連理に「詞・寄合をすてゝ、こゝろばかりにて付べし」と説明され、また、

一向詞の縁もより合もなくて、心ばかりにてもするなり。たとへば、「浪のひがた」といふに、「道替てゆく」など付けば、浦のあひしらひも詞の縁もなくて、心ばかりの付べき也

と、やや具体的にも述べている。浪が引いて干潟が現われたという前句の意想（心）を受けて、そのためにいつもの街道を通らないで干潟を通ると付けた場合である。前句の意想を契機にするだけで、詞の縁や寄合を取らないのが心付だというのである。

一般的にいって、およそ付合が成立するためには、前句と付句とは、なんらかの意味で意想上のまとまりをなしている。詞や寄合だけで付いて、意想上のまとまりが全然ない場合はよほどの特例である。「心付ならぬ句はあるべからず」であって、心も付くのが一般の場合である。ただ一般の場合は、詞の縁とかあるいは寄合とかが伴うのが普通であるのに対し、それを伴わないものを特に心付と呼んで区別したわけである。

(2)詞　付

これは「よりあひ（心）をすてゝ、こと葉のたよりにて付る也」（僻連。校合連理）とあるものだが、二つの点から検討を要する。一つは、寄合も心も捨てるというが、寄合はとにかく、心も捨てて詞だけで付くとは、実際にはどういうことか。第二は、詞で付くのと、前句付句に縁語を取ることとは、同じか区別されるかの問題である。詞付の具体的な説明と思われる次文についい検討してみよう。

仮令、「山のいほりにすみなるゝ」といふ句あらば、「けふ又くるゝ」などいふ詞ばかりにても付べき也。すみなれたる心の又の字にてあるべければなり。（僻連）

これは、「すみなるゝ」といふ継続の状態を、重ねる意の「又」の字（詞）で受けとめた点を詞で付けたとするのである。この例の限りでは寄合はたしかにない。しかし心の点では、立派にまとまりを見せている。心も捨てたとはいえないのである。そうではあるが、この例のように、「又」の字（詞）によって、前句の「すみなるゝ」を生かしている場合、「又」という特別な詞で受けとめる点を重視して、それを特に詞付と呼んだものと思われる。

次に縁語を取る場合との区別である。というのは、連歌秘伝抄では、「ながきと云になはと付、よると云に糸と付」けるのが詞付だと説明するからで、これだと、前句付句に縁語を配するのが詞付だとなる。ところがこの縁語は、前句付句に表現上の均整はもたらすが、意想上のまとまりに直接参加するものではない。その点、「又」という詞が意想上の付く関係の成立に直接参加しているのと

は別である。詞付が縁語も含む場合が良基に全然なかったとは断言できないが、前の具体側から考えると、縁語を含まない「又」の字の場合のごときが、基本的なものであったろうと思う。

(3)景気・眺望句

僻連・連理の景気の説明に、「これ（は）眺望など（の）おもしろき体をつくべし」とあり、眺望句も同種と考えてよいであろう。この景気は、付句の叙景的内容に着目した名目であって、その叙景が前句（抒情にしろ叙景にしろ）との間に意想上でも付く関係を保つことは、当然と考えていたようである。

以上の心付・詞付・景気は、心・詞・風景が付く関係の成立に直接参加し、付合の成立に欠くことのできない条件となっている。その中詞付は、たとえば「又」という詞だけ抽出したのでは不可欠の条件とはならぬが、その詞が付く関係を成立させる焦点的役割を負うとはいえるのである。

第二の問題の寄合について考察したい。一類諸体の名目の中、本歌・本説・名所などは寄合の問題として総括することができる。「寄合」の語は、良基連歌論に実に頻繁に見え、重要な術語となっているが、それには動詞と名詞の場合がある。動詞「寄り合ふ」は前に触れたが、ここで取りあげるのは名詞の寄合（よりあひ）である。（名詞の寄合が、付合とほゞ同義に用いられたと思われる例が、僻連・連理にたゞ一例見える。「寄合は作者の風骨によりて、かつてさだまれる所あるべからず」がそれである。）

寄合については簡単に述べたい。「いのちをすつる、生田河、常の寄合なれども」（撃蒙）のごとく、前句の「いのちをすつる」に対し、大和物語を典拠にして、付句に「生田河」と出すのが寄合である。「名所ノ寄合ニ須磨の山里ト云ニ柴ト云物ハ」（九州）の源氏物語、「在明ニツレナキナドバシレル古寄合ナレドモ」（十問）の古今集のような、物語・古歌をはじめ、「唐の文、世俗の事」（筑波問答）の中で、特に関係の深い語句が寄合となる。

この寄合には、いわゆる縁語も含まれるかと思う。歴史的に見ると、連歌の寄合は和歌の「よせ」の発展したものと思うが、その「よせ」は、いわゆる縁語である。三五記鬻本に、「歌はよせあるが宜しき事」として、「衣には、たつ・うら」などの縁語をあげているが、これはすべて為家の八雲口伝に見えるものであった。さらに遡ると、清輔の和歌初学抄の「秀句」がある。「天によせては、月・日・ほし・くも・あまのはら・あまのがはなどいふべし」以下多くを挙げている。上句下句にそれらの縁語を配置せよとの要請であった。この要請の発展拡大が連歌の寄合と思われるので、寄合には縁語も含まれると思う。寄合の最初の集大成である連珠合璧集にも、縁語が含まれている。

寄合は良基連歌論で重要なものとして取りあげられ、「寄合は連歌の大宗なり」（落書露顕）というまでになる。この寄合は、付合に親近感を与え、物語などの情景を連想させ、表現面に均整を与えるなど、種々なる効用をもたらすものである。その付合の成立への参加の仕方を見ると、物語や故事などを媒介にしないと付合の成立しないものもあるが、またあってもなくても付合は成立するといった類のものもある。付合の成立に直接参加するものと、付合の成立に対しては二義的な意味しかもたないものとの別がある。しかし後者のごとき場合でも、それによって、親近感・連想美・均整美などをもたらすところから、これがきわめて重視され、付合の重要な着眼点

となったのである。

第三の小宛の問題は、諸家の研究があるので、これも簡単に触れる。寄合が、古歌・物語・詩文などに典拠を求める意味で視野の拡大であったに対し、小宛は付合の焦点化を求めるものである。心・詞・寄合などについてそれが求められている。図書寮本知連抄によると、夜の明けるという句に烏を付けるときは、鳴く体をするのが心の小宛であり、梨に杖は普通の寄合だが、親の子を打つ杖という句に梨を付けては寄合の小宛にそむく。詞の小宛とは、「老の浪」とするには前句に「浪の肝要の詞」を必要とするごときだという。焦点から逸脱しないことを厳しく求めるものであった。

以上は要するに、付合の成立に参加する要素についての分析的な把握が進み、それらが正しく参加するための条件（小宛）にも及んだということで、付合に対する認識の深化を看取することができる。

四　付合の型

二類に挙げた諸体は、前に述べたように、前句と付句の間の付合関係がどんな構造をとって成立しているかに着目したもので、付合の構造的な型というべきものである。それについて具体的に考察するのであるが、これらの諸体は、さらに二種に分けることができる。一つは、平付に対して、対揚（相対）・引違を対置させるもので、これらは構造における表現の方向に関するものである。他の一つは、四手に対して、埋付・余情を対置させるもので、これらは構造における距離に関するものということができる。除景物は埋付に接近するもの、「かけ句」「退句」は転ずる手法であって、やはり方向に関するものといえよう。

Ⓐ方向に関するもの。

平付　これは「様もなく、見る所をありのまゝに付」けるものだと説明されている。また「見る様にこもれる所もなく、目とあらば山の秋風とも、花とあらば峯の霞とも、加様の物をちともはたらかさで、景気眺望を見る様に有興て付る」（僻連・連理）とあるのが、叙景の場合を例にしたが平付に当たるようである。「見る所をありのまゝ」といい、「ちともはたらかさで」が注目される。前句の表現の方向に添って、同趣同傾向の句を付け、その間にことさらな趣向を用いないものである。

対揚（相対）　これは「春に秋朝に夕山に野などのたぐひ」と説明されている。相対立させるのである。

引違　「月の夜に雨をこひ、花の句に風をしのぶ類也」とある。風雅の常識にあえて逆行する例である。

この両者は、前句の表現の方向にすなおに随順しないで、それに対立したり逆行したりする。平付が同方向に随順するに対し、これは逆な方向を志向する。もちろんその対立も逆行も、ことさらに設ける趣向で、全体としては付く関係を成立させるものである。

かけ句・退句　詳しい作例があるが省略する。前者は後世のいわゆる「取り成し付」であり、後者は、「かけてには」や縁語によって句境を転ずるものである。対揚、引違のどちらとも異なるが、表現の方向を変える点で、平付とは全く異なり、置くとすれば、対揚・引違の側に置くべきものである。

Ⓑ距離に関するもの。

四手　説明に「たしたにきりくみたる」ものだとある。筑波問答に

も「いかにも寄合のかず四手に付」けるものと説いている。「寄合のかず」「たしかにきりくむ」とは、

手枕のなみだまぎれてをく露に
あきやかなしき人や恋しき　（撃蒙）

のように、二対（○○印と△△印の）の関係を結ぶごときものがその例である。前句と付句の付合が緊密で、両者の間になんら間隔がない。集景物・分句・秋風万葉などみなこれである。

除景物　撃蒙抄に、前述の集景物と対して説くもので、「先句の景物多とき肝要を目にかけて自餘をすつる」とある。寄合による付合の緊密感を減らして行くもので、四手の息苦しさよりいくぶんゆとりが出てくる。

埋付　これは「うへには付かぬ様にて、したに（は）ふかきこゝろあり」と説明され、また、

いづくいかにと付たるやらむとおぼゆるを、よく〳〵案ずれば、をのづから深き心のあらはれて、幽玄なるおもかげそひて、いさゝか理あり（うづみ）て、下にふかく付たる（僻連。校合連理）

と説くものもそれに当たる。僻連で「理ありて」としたところが、連理秘抄では「うづみて」に改訂されている。四手のように表面に現われた寄合の緊密さがなく、一見疎遠に見えるものである。四手と埋付とは、「ささめごと」で署名になる親句・疎句のごときものと考えて、ほぼよいかと思う。

余情　これは「いさゝかいはれぬ様なるに、よせひのありておもしろき也」と説明されている。「いさゝかいはれぬ様」は、埋付の「うへには付かぬ様」の説明に近く、「よせひありて」は、埋付の「幽玄なるおもかげそひて」に近似する。「余情」としたところに、これとしての特徴はあるが、構造的関係からいうと、埋付と同じく一見疎遠な関係をなすものと見られる。連歌秘伝抄で、埋付だけを立てて、余情を挙げない理由もそのへんにあったかと思う。

結局、前句と付句の構造的な関係にあって、四手は密接で距離のないもの、埋付・余情は、一見疎遠で距離のあるもので、親句・疎句の術語は用いなかったが、同様の観点から付合の構造的関係を把握していたものと考えられる。

以上概観したようにⒶは付合の構造を表現の方向という観点から捉え、Ⓑは距離の観点から捉えている。この方向と距離という二つの観点は、後世に成立する添・随・離（放）・逆の四道の分類原理として継承されている。（俳諧大辞典、四道の項参照）四道ではその観点を名目の上にも示しているが、良基連歌論ではそこまでは到っていない。おそらく多分に自然発生的な名目であったろうと思う。しかし付合の構造に対するかなり深い認識の存したことは確かである。

おわりに

概説に終ってしまったが、付合に対する認識の基本的な問題はほぼ尽したかと思う。付合の作用そのものの捉えかた、付合関係の成立に参加する要件への認識、付合の構造についての認識などであったが、それらについての概観を通じて、良基連歌論がかなり深い分析的な認識を示していることを知った。こうした認識は、連歌表現論の方法をなすものであって、それによってたとえば、

凡上手ノ連哥ハノキタル様ナレドモ、心ガオモシロク寄合ナリ。サレバ連哥ノヨリアヒヲ捨テゝ而モ心ハ付タルヲ秀逸ト申ベシ。

下手ノシタル句ハ、四手ニ寄合タル様ニテ心ガノク也。サレバ連歌ト浮世トハ捨ガ大事ナルト申ハ此事也（九州問答）

のごとき風体論が展開される。傍点した名目の外、「ノキタル様」に埋付の観点が見られ、それらを駆使して上手と下手の風体の比較を行っている。これは一例に過ぎないが、上述の分析的認識によって、付合という連歌独得の表現は、縦横に照射され解明される。そうした意義を担う付合認識の方法を概観し、それぞれの概念を明らかにし、かつ分類整理を試みたが、言及不足は随所に残されている。後日を期したい。

――広島大学文学部教授――